２０２５／０１／１２　　礼拝メッセージ　　近藤　崇志　牧師

主　　題：贈り物の管理者として
聖書箇所：随所

今朝、いつも見るヨハネの福音書から少し外れて皆さんと一緒に考えたいことがあります。それは、喜んでささげることです。神様から与えられた贈り物を管理している者として、どのように自分やほかの人、神様のためにその贈り物を用いるのかです。

少し考えてみてください。この１週間を振り返ってみた時、皆さんは、自分のために何かを買ったり、家賃や光熱費、食費や病院代などの支払いをしたことがあったでしょうか？家族や友人、同僚や近所の人の誰かに、自分の持っているものの中から何かをあげることはあったでしょうか？また、神様の前に献金などをささげることはあったでしょうか？おそらくすべての人が、何かしらはあったと答えるでしょう。私たちは、それぞれ自分の手もとにあるお金や持ち物などをいろいろな形で用いながら、日々生活をしているのです。しかし、振り返ってみて、何かを買ったり、支払ったり、与えたりする時に、私たちの心は、いつも喜びにあふれていたでしょうか？ささげることに感謝や満足を見出していたでしょうか？それとも、自分の手から離れていくお金や持ち物を目にする時、ストレスや不安、不満を覚えていたでしょうか？何かを失うことを嫌って、それを手放すことをためらっていたでしょうか？はたして、私たちは、今自分自身が、神様から与えられたものの管理者として生かされているという事実を、正しく心に留めているでしょうか？

思い返してみてください、先週私たちは、ヨハネの福音書の３章から、衰えることを喜びとしたバプテスマのヨハネの姿を見ました。かつて、ユダヤ全国の人々の注目の的にあった人物が、イエス様の登場によって、徐々に徐々に立場を失っていった時、彼の弟子たちは、不満を抱いていました。彼らは、自分たちの師が担っていた働き、持っていた力や影響力が奪われていると感じて、強い焦りや嫉妬を覚えていたのです。彼らには、心の中で自分たちのものと思っていた、信じていたものを喜んで手放すことができませんでした。しかし、そんな弟子たちに向かってヨハネは言っていました。何て言ったか覚えていますか？ヨハネは言ったのです。「**人は天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません。**」（ヨハネ３：２７）、「**あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。**」（ヨハネ３：３０）と。

ヨハネは、弟子たちとは違いました。彼は、すべてのものが自分自身で勝ち取ったものではなく、天からやって来たものだとわかっていました。すべてが神様の所有物であって、ただ恵みによって自分に与えられているものに過ぎないと、自分はただ恵みによって与えられた贈り物の管理者にすぎないと心から信じていました。だからこそ、彼はへりくだることを自ら望んで、主の前に自分自身のすべてをささげることを何よりの喜びとしたのです。

ここで、改めて大切なことに気づかされませんか？ささげるという行為は、実際にどのようなものをささげたのかという表面的な部分以上に、その人の心の内側や奥底にあるものを明らかにするのです。ヨハネと時間をともにしていた弟子たちは、当然、ヨハネのことばを何度も何度も聞いて、その内容を口にすることも容易にできたでしょう。これまで私たち自身もささげることの大切さについては何度も何度も聞いてきて、それを認めていて、「私たちにとって本当に必要です。」と口では言うかもしれません。しかし、何を口で言ったとしても、実際に何をささげるかが、その人が何を愛していて、何を本当に信じているのかを明らかにします。別のことばで言えば、私たちに与えられているお金や持ち物をどのように扱っているのかは、私たちが何に優先順位を置いて歩んでいるのかを明らかにしてくれるのです。自分のうちにどのような罪やプライドがあるかだけでなく、私たちが、何を一番に愛していて、何を一番大

事に思っていて、何に一番信頼を置いて歩んでいるのかは、私たちがそれを手放す姿やささげる姿から見て取ることができると言うのです。

イエス様もはっきりと言われていました。「**あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。**」（マタイ６：２１）と。ささげることと、与えること、それぞれの信仰には非常に密接な関係がありました。だからこそ、私たちが管理者としてますますキリストに似た者へと成長していきたいと願うのなら、ささげる、与えることに関して、聖書がどのような内容を教えているのかを正しく理解している必要があります。

〇喜んで捧げることに関する四つの指針

そのために、きょうは、私たちが管理者として喜んでささげるということについて、聖書が教えていることを四つ見てみましょう。私たちが、いつも覚えているべき四つの指針を聖書は、私たちに与えてくれています。ささげることに関して、いったい聖書が何を言っているのかを、いつもなら一つの箇所を中心にしてそこを掘り下げて見ていきますけれども、きょうはいろいろな聖書の箇所を見ながら、聖書が全体を通して私たちに教えようとしているそのメッセージを一緒に学んでみましょう。皆さんの励ましになることを心から願っています。ではさっそく一つ目の指針から見てみましょう。

１．喜んで捧げることは神様への礼拝

聖書の教えている一つ目の指針は、喜んでささげることは神様への礼拝だということです。ピリピ４：１５－１６、１８で、パウロはこのように述べていました。まず１５－１６節にこのように書いています。「**:15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおり、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。:16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくれました。**」と。そして、１８節に「**私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エパフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です。**」と書いています。パウロは、この箇所でピリピの兄弟姉妹に対する感謝の思いを綴っていました。ピリピの教会は、パウロの宣教の働きを陰で支え、特に、物質面や財政面における必要を満たすために、さまざまな贈り物を送っていたのです。

ここで興味深いことばが使われていたことに気づきましたか？教会から自分のもとに送られてきた贈り物に対して、パウロは別のことばで表現していたのです。何と言われていましたか？１８節にこんなふうに書いていますよね。贈り物を指して、「**それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です。**」と。ここで使われていた**「香ばしいかおり」、「供え物」**と聞くと、何か頭に思い浮かぶものはないでしょうか？どちらの表現も旧約の時代、人々が犠牲を払ってささげていたささげ物、いけにえを連想させるものでした。これらは、神様に対してささげられる礼拝を現わすものだったのです。

パウロは、自分が受け取った贈り物を見た時に、何を言わんとしたのでしょうか？パウロにとって兄弟姉妹がささげた贈り物は、単に彼自身を喜ばせるだけのものではありませんでした。それは、究極的には神様を喜ばせる彼らの神様に対する礼拝だったと言うのです。贈り物は、神様にささげる礼拝なのだと。少し立ち止まって考えてみてください。はたして、私たちは普段からささげることや与えるということをこのように考えているでしょうか？多くの人は、礼拝ということばを聞けば、日曜にささげる礼拝をすぐに考えるでしょう。祈ったり、賛美をしたり、みことばを学んだり、聖餐にあずかることを同じように礼拝と考えたりもするでしょう。

しかし、ささげるものは、献金だけではありません。私たちが、日々の生活を歩んでいる中で、誰かの必要を満たすことも、犠牲を払って誰かに何かを与えてあげることも同じです。それら一つ一つが、神様の前にささげる私たちの礼拝だと信じているでしょうか？ヘブルの著者も同じことをこのように言っていました。ヘブル１３：１５－１６に「**:15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわ**

ち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。:16 善を行うことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。」とあります。考えてみてください。もし、仮に偉大な王様の前に何かを持って行く機会があったとすれば、その人は、自分の持っている物の中から最高の物を自ら進んで持って行こうとするでしょう。本当に王様を喜ばせたいと願っているのであれば、いやいやながら傷ついているものを適当に選んで持って行くことはしないでしょう。むしろ心からの喜びを持って、どんなに大きな犠牲を払うことになったとしても、それを厭わないでしょう。忘れてはならないのは、私たちがささげることも、また与える行為も同じだということです。私たちは、それぞれ神様から恵みによって、さまざまなものを託されています。そして、それらを私たちが神様やほかの人たちのために用いる時、そのすべてが、私たちにとっての供え物でした。私たちが何かをあげる時、私たちは頭の中で、その人と自分の関係のことだと思っているかもしれません。しかし、みことばを見ると、私たちが与えるということは、神様の前にささげている礼拝なのだと言うのです。

とすれば、いつも私たちに問われることがあります。私やあなたがささげているものは、自ら進んでささげている感謝や賛美にあふれたものでしょうか？王である神様が喜んでくださるそんな香ばしいかおりのものでしょうか？それとも私たちが与えるものは、心のいっさい伴っていない投げやりでなされているものでしょうか？何も考えず、いつもどおりの自分の習慣であるから与えているものでしょうか？喜んでささげる、与えるということは、仕方なく妥協してするものでは全くありません。どうしてかというと、何よりもまず私たちが与えることが神様にささげる心からの礼拝だからです。そして、これこそ私たちが覚えているべき聖書が教える一つ目の指針でした。

２，喜んで捧げることは神様の愛される行為

聖書の教えている二つ目の指針は、喜んでささげることは神様の愛される行為だということです。パウロがⅡコリント９：６－７にこのように記しています。「**:6 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。:7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。**」と。この二つ目の指針は、一つ目と深く結びついています。ささげることが、神様への礼拝であるなら、そこには何をささげるのかよりも、どんな思いや動機でささげるのかという神様の求めている心の態度が、いつも問われました。神様の前に喜ばれるささげ物をささげようとするのであれば、それにふさわしいささげ方があると聖書は言うのです。

いったいそれはどのようなものでしょうか？パウロはこの７節のところで、心の態度に関して、三つの要素を具体的に挙げていました。どのような態度で私たちがささげるべきなのか、少なくとも三つここに見て取ることができます。

●捧げる態度

１）いやいやながらでなく

一つ目は「**いやいやながらでなく**」でした。「**いやいやながら**」と訳されていることばには、もともと「悲しみから」とか「悲痛の思いから」という意味が含まれています。つまり、「いやいやながらささげない」というのは、悲しくつらい思いをもってささげないということです。たとえば、何かを与える時、自分の手からそれが離れていくこと、失われていく様子を見て、心のうちでなげいたりしないことです。だれかの必要を満たしてあげようとする時に、自分のために取っておけば良かったと後悔しないことです。いやいやながらささげる人は、たとえ何かをささげていても、それがどんどん心の重荷になっていきます。ささげることが、どんどん、どんどん自分の心を重く、重くしていくのです。喜びではなくて、それを失うことの悲しみが、ささげることに対するためらいがどんどん、どんどん自分のうちに増し加わっていくのです。でも、そのようにしてささげるささげ物を神様は求めてはいませんでした。悲しみをうちに抱えながら、いやいやなすのではなくて、自ら進んでささげることが、神様の喜ばれる心の態度でした。

２）強いられてでもなく

二つ目に出てきていたのは「**強いられてでもなく**」でした。一つ目は、内側の悲しみについて言われていました。私たちは、内側に悲しみを抱きながらささげることはしないのです。そして二つ目は、同時に外側からだれかや何かに強いられてささげることもしないことです。悲しみを持ってささげることもしなければ、私たちは周りの人から何かしなさいと強いられてささげることもしないのです。

たとえば、言い換えると教会のリーダーたちがささげなさい、ささげなさいと口うるさく言うからするものではありません。与えるのは、周りの兄弟姉妹がしているのを見て、同じようにしないといけないと罪悪感を覚えるからするものでもありません。ささげていない姿をだれかに知られたらまずい、不誠実だと思われたら困ると、自分の体裁を保つためにするものでも当然ありません。私たちはいやいやながらでもなく、だれかに強いられてでもなく、自ら進んで喜んでささげることが求められているのです。

３）心で決めたとおりに

三つ目に、「**心で決めたとおりにしなさい**」と言われていました。ここで「**決めたとおり**」と訳されていることばは、新約聖書の中でここだけにしか登場しないものです。「前もって決める」とか、「前もって選ぶ」という意味が、含まれているのです。つまり、心で決めたとおりにささげるということは、その人がささげ物をする時には、あらかじめ自らが決めたものやあらかじめ自らが考えて意図的にささげる物でなくてはならないと言うことです。自分が祈って考えて、意図的にささげるのです。逆を言えば、何も考えずに妥協した物を与えることや余っている物の中から適当にささげるようなことはしないのです。ひとりひとりが、ささげる責任を持っているからこそ、私たちはそれぞれがどれだけ何をささげるのかを祈り求めながら自発的に決めていく必要があるのです。

振り返って少し考えてみてください。ある人は、教会に着いて献金をささげる時になってからどうしようかと悩んで、その時の気の向くままに思いのままにささげているかもしれません。また、ある人は何かを与えようとする時に、置かれた状況や自分の環境にいつも身をゆだねているかもしれません。今は余裕があるからささげましょう、今は余裕がないので、与えるよりもまず自分が何を受けられるかを考えましょうと。残念ながら、そのような態度は、主の前にふさわしいものではありませんでした。

ささげることや与えることは、どのような時も受け身的なものではなかったのです。喜んでささげる人は、たとえどのような状況にあっても、自分自身がささげたいから喜んでささげようとするのです。マケドニヤの兄弟姉妹たちが、まさにそうでした。かつて、ひどい飢饉に見舞われて、ひどく困窮していたエルサレムの教会の状況を聞かされた兄弟姉妹たちは、エルサレムの教会に贈り物を送りました。そのような彼らの行為に関して、パウロは、Ⅱコリント８：１－５でこのように述べていました。「**:1 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。:2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。:3 私はあかします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、:4 聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。:5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました**」と。注目してほしいのは、マケドニヤの信仰者たちが、物や富にあふれて豊かだったからささげたのではないということです。特に２節に「**苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。**」と書かれています。彼らは、快適な生活を送っていたのではありませんでした。激しい試練を経験し、ひどい苦しみの真っただ中にありました。余裕があったのではありません、極度の貧しさを覚えていました。自分たちの生活もままならないほど彼らは何も持っていなかったのです。しかし、そんな中にあってなお彼らは喜びに満ちあふれていました。彼らは喜びに満ちあふれすぎていたからこそ、喜びが自分たちのうちから出てくるのを止めることができず、喜びのままに犠牲を払って、彼らは惜しみなくささげようと、惜しみなく与えよう

と歩んでいたのです。置かれている状況を考えると、彼らは自分たちのことだけに目を向けて歩むこともできる環境でした。しかし、置かれている状況や環境が、彼らのそのような歩みや行為を妨げることはなかったのです。彼らは、神様から自分たちに託されているものを分かち合うことに惜しむことなく、自らの意志で、喜んで与えようとする者たちでした。

いったいどうして彼らは、そのようにふるまうことができたのでしょうか？どうして彼らは、そのような状況の中で喜んでささげることができたのでしょうか？いろいろな理由があるでしょうが、確実に言えることは、彼らは、自分たちが管理者だということを覚えていました。そして、管理者としてただ神様から与えられている自分たちのものでない物をささげようとし、そして、何よりも神様のうちに喜びや満足を見出していたのです。

言い換えれば、彼らは、持ち物や富のうちに自分たちの拠り所や宝を見出そうとしてはいませんでした。彼らが、持っていたほんのわずかな物を自分たちのものなのだと思っていれば、それらのものを自分たちが失っていく時、彼らの心からも喜びが失われていったでしょう。しかし、彼らは貧しい中で自分たちが持っていたその些細な物でさえ、神様のものであると信じていました。そして、彼らはそのようなものを自分たちがささげる時、ほかのだれでもない神様にささげていることを覚えていました。与えることを通して自分たちが、神様を礼拝し、そして、神様の栄光を現すことにつながるとわかっていました。彼らの歩みは、物や状況に左右されることはありませんでした。どんな状況にあったとしても、愛する神様にあって、彼らは変わらない喜びを見出して、その喜びをほかの人にも進んで分かち合おうとしていたのです。

このことは私たちも同じでした。私たちもいやいやだれかに言われたからささげるのではありません。自分の意志を持って与えることが大切でした。問われるのはどれだけの量を与えるのかではありません。私たちが、神様の前に礼拝としてささげることを覚える時に、私たちは量ではなく、どのような心でささげるのかが大切だということです。そして、私たちが喜んでささげるのであれば、そのように喜んでささげる者のことを何よりも神様が、主が愛してくださっていると言うのです。これが、私たちが覚えておくべき聖書が教える二つ目の指針でした。

３．喜んで捧げることは神様への信頼の表れ

聖書の教える三つ目の指針は、喜んで自分でささげることは神様への信頼の表れだということです。マルコ１２：４１－４４に、イエス様がご覧になった一つの光景が描かれていました。「**:41 それから、イエスは献金箱に向かってすわり、人々が献金箱へ金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持ちが大金を投げ入れていた。:42 そこへひとりの貧しいやもめが来て、レプタ銅貨を二つ投げ入れた。それは一コドラントに当たる。:43 すると、イエスは弟子たちを呼び寄せて、こう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりもたくさん投げ入れました。:44 みなは、あり余る中から投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。」**」と。間違いなくこの場にいた弟子たちや人々は、献金箱に多くを投げ入れる金持ちたちの姿に目を奪われていたでしょう。しかし、イエス様は違う所を見ておられました。人の内側をご覧になられる主は、ひとりの貧しいやもめに目を留められたのです。そして、その女性が２枚のレプタ銅貨を投げ入れていました。ちなみに、この当時レプタ銅貨は、貨幣の中で最少額でした。そこにいた大勢の人たちにとっては取るに足らない些細なお金でした。しかし、彼女にとっては文字どおりそれがすべてでした。そして、すべてのお金を彼女はささげたのです。すごいと思いませんか？もし彼女が少しでも自分自身の生活に不安を覚えていたとすれば、２枚あった貨幣のうち１枚をささげて、１枚を自分のために取っておいてもおかしくなかったでしょう。けれども必要な物を備えてくださる神様に信頼していたからこそ、彼女は御手に自分自身をゆだねて、たとえ貧しい中でも喜んでささげようとしていたのです。

ドナルド・ホイットニーという先生もこんなことばを残しています。「貧しいやもめは、『あるだけを全部、生活費の全部』を捧げました。神が自分を養ってくださると信じていたからです。同じように、私たちも神が自分たちに与えてくださると信じる度合いに応じて捧げようとします。神は必要を満たしてくださるという信仰が強ければ強いほど、神に捧げることをリスクだとは感じずに進んで行おうとします。しかし、神への信仰が弱ければ弱いほど、神に捧げたいという気持ちも小さくなるのです。」と。

少し立ち止まって考えてみてください。私たちは、実際に神様をどれほど信頼しているでしょうか？神様に対する信頼は、日々のささげることや与えるという行為のうちにどのように現れているでしょうか？正直になれば、私たちはみな、難しさを覚えることがあります。喜んでささげる人に成長したいと思っても、将来に対する心配や不安に心が奪われて、容易に喜びや平安を失って、惜しみなく与えることにためらいを覚えてしまうことがあります。恐れから神様やほかの人にささげることや与えることをしぶり、犠牲を払って与えるよりもまず自分が何かを得たいという思いに心がとられてしまう弱さを持っています。そんな弱さのうちにある戦いと、私たちは向き合わなければならないのです。

私たちは、どうしたら喜んでささげる者として変わり続けられるのでしょうか？鍵は、ある意味シンプルでした。私たちが、神様の姿を正しく覚え続けることが鍵でした。私たちは、いつも神様の姿を正しく覚え続けなくてはいけません。興味深いのは、与えることに関して述べた後、パウロはこのようなことばを残しています。さっき私たちが見たⅡコリント９章に戻ってみると、パウロは、６－７節のところで与えるということに関して教え、その後８節のところでこんなことを記していました。７節の最後から読むと、「**……神は喜んで与える人を愛してくださいます。:8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。**」と記されています。神様はどのようなお方でしたか？神様はあらゆる恵みをあふれんばかりに与えることのできるお方でした。

私たちの聖書の神様は、何の力も持っていないか弱い存在ではありません。この方は、この世界のすべてのものをことばだけで造られた偉大なお方でした。年を重ねて老人となっていたアブラハムとサラのもとに約束どおりに息子イサクを与えることができ、処女マリアのもとに約束のとおりに救い主イエス・キリストを与えることのできたお方でした。マリアのもとに現れた御使いは、ルカ１：３７で「**神にとって不可能なことは一つもありません。**」と言っていました。私たちにはできないと思うことも全能の神様の前には何の問題もありませんでした。そして、そんな神様が私たちとともにいてくださるだけでなく、私たちが喜んで与える時に、私たちに必要なすべてのものを恵みによってあふれんばかりに備えることができると約束してくださったのです。私たちが、何かを人々に与えようとする時、私たちが与えるのに必要になる物を神様は備えることができます。私たちは時に心配になって、つぶやくかもしれません。もし自分の持っている物をだれかに与えれば、自分にはもう何もなくなってしまいますと。惜しみなくささげ続けていけば、自分の将来はどうなってしまうのでしょうかと。

しかし、みことばは、私たちにはっきりと言うのです。心配しなくていい、神様は喜んで与える者を何よりも愛してくださって、その者が、ますます豊かに与えることができるように必要となるすべてのものを恵みによって備えることができる、神様にはそれができると。ですから私たちが、与えることやささげることに関して問われるのは状況ではありません。私たちがどれだけ神様を信頼するかということです。神様は、備えを与えることができると言われている約束に対して、私たちがどのように応答するかです。揺るがない約束が与えられているのであれば、私たちに問われるのはどのような心でささげようとするかです。私たちにできるのは、必要な物を備える、不可能なことは一つもないと言われた神様に感謝しながら、どんな時も信頼して自分の身をささげ続けることです。この方に向かってささげることは、確かに神様に対する私たちの信頼や信仰を明らかにするものでした。それが、私たちが覚えているべき聖書の教える三つ目の指針だったのです。

４．喜んで捧げることは神様の祝福をもたらす行為

聖書の教える四つ目の指針は、喜んでささげることは神様の祝福をもたらす行為だということです。Ⅱコリント９：６にこのように簡潔に記されていました。「**私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。**」と書かれています。読んですぐに気づかれたと思いますが、パウロは、ここで種蒔きをしているふたりの農夫の様子をたとえとして用いていました。ひとりは**少しだけ蒔く者**、もうひとりは**豊かに蒔く者**でした。**少しだけ蒔く者**とは、どのような人のことを言うのでしょうか？この人物は、種を蒔くことにためらいや迷いを持っている者でした。種蒔きの季節がやって来たとしても、持っている種を惜しみなく使うのではなく、けちけちして渋るのです。逆に**豊かに蒔く者**とは、どのような人を言うのでしょうか？この人物は、種を蒔くことにためらいや迷いのない者でした。種蒔きをする季節になれば、豊かな収穫を期待して持てる種を出し惜しみせずに使うのです。

想像してみてください。このふたりの人物が、種蒔きをしました。収穫の時期がやって来て、畑に出向いていた時、種を植えたふたりの畑はそれぞれどのようになっているでしょうか？当然少しだけ蒔いた方の畑は収穫も少なく、豊かに蒔いた方の畑は多くの収穫物を手にしました。何がその違いを生み出したのでしょう。違いは種を蒔いたか蒔いていないかではありません。彼らがどのように種を蒔いたかでした。ひとり目は、種を失うことを惜しんで少しだけ蒔いたので、そのとおりに少しだけ刈り取りました。ふたり目は、豊かに蒔いたのでそのとおりに豊かに刈り取りました。惜しまずに種を蒔いたからこそあふれんばかりの収穫物や祝福を後で手にすることになったのです。つまりどのように蒔くかが、どのように刈り取りをするかを決めるのです。もっと言えば、どのようにささげるのかが、どのように祝福を後で手にするのかにつながるということです。

間違ってもこれは繁栄神学が、教える話をしているのではありません。パウロは、何も人が与えれば与えるほどますますこの世で物質的に豊かになるとか、快適な生活が約束されるというようなことを教えようとしたのではありません。惜しみなく種を蒔く者には、神様が惜しみなく豊かに報いてくださるという事実を明らかにしたにすぎません。喜んで豊かに与える者には、神様がそれに見合った祝福をいつの日か与えてくださると期待できるのです。その祝福をこの地上の歩みの中で手にすることができるかどうか、私たちにはわかりません。しかし、この先、必ずその報いをなしてくださるという約束を私たちは、与えられているのです。そのことを覚えるのであれば、私たちが、神様や兄弟姉妹の必要のために喜んで何かを与えようとする時、私たちは、いつもある一つの確信を持ち続けることができます。それは、私たちの与える物は、むなしくどこかに消えてしまう物ではなく、必ず後で実を実らせて収穫することができるものだということです。主の働きのために私たちが犠牲を払ってささげ続けていくのなら、それは決して決してむだにはならないと言うのです。豊かに与える者には、豊かな収穫の日が待っていると言うのです。

振り返ってみれば、これと同じことを聖書は繰り返し教えていました。箴言１１：２４－２５に「**:24 ばらまいても、なお富む人があり、正当な支払いを惜しんでも、かえって乏しくなる者がある。:25 おおらかな人は肥え、人を潤す者は自分も潤される。**」と記されています。イエス様も言われていました。ルカ６：３８「**与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。**」と。神様にささげ、だれかの必要のために私たちが喜んで与える時、私たちは自分の持っている物を失っているのではありません。確かにその時自分の肉は言うかもしれません。どんどん自分自身の持っている種が消えてなくなっています、これ以上は限界です、ここまでは進んでささげられたけれども、あとは自分のものです、これ以上は失ってはいけませんと。しかし、覚えているべきは、私たちに与えられている種は、そもそも自分の物ではないのです。その種は、神様の所有物でした。そして、神様から与えられて

いるその種を私たちが、惜しまずに神様のためにささげていくのであれば、私たちが主の畑に種蒔きをし続けていくのであれば、後に主の畑から豊かに収穫する日がやって来ることを期待できるのです。

管理者である私たちが考えなければいけないことは、どのようにささげようとするかです。大切なのは何に心を留め続けているかです。今、自分が持っているそもそも自分の物でない神様の所有物である種を失わないようにと一生懸命に守ることに心を留めるのか、それともいつか来る刈り取りの日の収穫物に心を留め続けるのかどちらかです。惜しんで少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は豊かに刈り取るのです。はたして私たちは収穫の日、いったいどのような状態の畑を望むでしょうか？

私たちは喜んで与えること、ささげることを学んできました。もしこれから先、喜んでささげることに難しさや大変さを覚える場面に直面するのであれば、私たちは何よりもまず自分たちに与えられた最大の贈り物を思い出し続けることです。面白いのは喜んでささげることや与えることについて触れたⅡコリント８章と９章の最後をパウロはこのようなことばで締めくくっていました。献金や与えること、ささげることついてずっと語ってきたパウロは、最後に９：１５でこのように言っていました。「**ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。**」と。私たちが喜んでささげようとするのは、私たちのために喜んで最高のものをささげてくださった方がおられるからです。ほかのだれでもない神様がご自身のひとり子であるイエス・キリストを私たちのために与えてくださいました。私たちが神様を愛したからこの贈り物が与えられたのではありません。私たちが、神様に頑なに逆らってただ御怒りを受けてしかるべき、滅ぼされるべき子として歩んでいた時に、まず神様が、私たちに愛を示してくださったのです。どうして私たちがいやいやながらでもなく、強いられてでもなく、自分で決めたとおりにささげようとするのかというと、神様がいやいやながらでもなく、強いられてでもなく、ご自分で決められた時に、ご自分のタイミングで贈り物を与えてくださったからです。

神様は、私たち罪人のためにご自分の大きな愛のゆえに、惜しむことなくことばに言い表すことのできない恵みの賜物をささげてくださいました。それを受け取ったのであれば、すばらしい恵みの贈り物を覚えるのであれば、私たちのふさわしい応答はいったい何でしょうか？私たちがささげる時や与える時の姿は、いったいどのような姿を反映しているでしょうか？喜んで愛のゆえにいやいやながらでも、惜しむことなく、強いられてでもなく与えてくださった神様の姿を表すものでしょうか？それとも神様を知らない人のような姿を表しているでしょうか？測り知れない恵みを受けて、今も恵みによって生かされている私たちは管理者です。管理者に問われるのは忠実であり続けることです。ですから、ぜひともにますます忠実に喜んでささげる者として成長し続けていきましょう。